スラム街の天使

笑顔の無い少女

春日信彦

笑顔の無い少女

１０月９日、東京から京都までの「寝台列車不倫旅」の撮影を昨日終えたヒカル監督は、朝早く一人でホテルを出た。スタッフ、男優、女優たちと一緒に１０時３７分の京都発新幹線ひかり２８号に乗ることになっていたが、予定を変更して一足先に事務所に戻ることにした。と言うのは、真夜中に社長から極秘の指示を受けたからだ。別に急を要する用件ではなかったが、前例のない社長直々の依頼だったため、直接社長と会って詳しい事情を聞きたかった。

一番ホームに到着したひかり３４号、７時１４分に乗り込むと窓際の席に腰かけ、じっと眼を閉じた。しばらくすると昨夜の社長の声がよみがえってきた。話は単純な内容であった。大手のスポンサーの依頼でシンガポールの少女を使ってレズ物を一本制作してほしいとのことだった。しかも、出来上がった作品は誰にも試写させることなく、即座に、直接監督が社長のところに持ってくるようにとのことだ。彼女の観光ビザは今月の２０日までだから、遅くとも１７日までに届けるようにとの指示だった。

仕事の内容は別段難しいことではない。しかし、このような仕事は初めてであり、なぜ、社長が直々電話をしてきたのか不思議であった。この少女はいったい何者なのだろうと言う疑問が昨夜から頭から離れなかった。少女は英語が分かると言うことだが、演技の指示が万が一うまくいかなければ、女優の優希を使うことを密かに考えた。彼女は英会話が得意で、監督の右腕ともいえる懐刀だ。

東京駅に到着するとタクシーで渋谷に向かった。１８階建てのブルーツインビルのエレベーターに飛び乗ると１１のボタンをプッシュした。１１階のほとんどを占めているコスモムービーコーポレーションの受付に挨拶するや、社長室のドアをノックした。社長は約束通り在室していた。いつものようにデスクで葉巻を吸っていた。「やあ～」と監督に声をかけると席から腰を上げ、デスクの正面にあるワインレッドのソファーに向かって疲れた表情を見せて歩き始めた。

監督に腰かけるように手招きするとブルドッグのような頬を震わせ「無理を言ってすまん」と一言つぶやいた。監督は仕事の依頼に関してはまったく気にしていなかった。気になっているのは少女の素性だ。「社長、その少女って何歳ですか？それと名前は？」監督は体格とか容姿よりも年齢が気になっていた。「名前は・・あ、そう、スアール、年齢はわからん。コロナ商事の社長秘書からの話でな、とにかくレズ物を一本制作してほしいと依頼があった。時間は２０分程度のもので、特に、少女の顔、スタイルをしっかりアピールしてほしいとのことだ。驚くことに、この程度の作品に３００万円も支払うそうだ」

「へ～、それはありがたいです。しかし、何か胡散臭くありませんかね～、確実に購入してくれるとわかれば気合を入れて制作しますが、トラブルに巻き込まれるようなことはありませんかね～、この少女はいったい何者ですか？コロナ商事とは直接関係ないように思うのですが・・」監督は高額な報酬にますます胡散臭く感じた。「君もそう思うか、わしも不思議に思っているんじゃよ。この少女を操っているのはいったい誰なのか？コロナ商事とは直接関係ない組織じゃないかと思うのだが」社長も気持ちがすっきりしなかった。

監督はしばらく黙って考えていた。「この少女に関して他に何か？」社長は膝を叩いて思い出したように付け加えた。「少女にはボディーガードがいてな、そう、撮影は少女のマンションで必ずやるようにと念を押された。それと、この件は絶対に他言しないように、撮影は監督直々に極秘にやるようにとも念を押された」社長の額から脂汗が出始めた。監督は大事件を始めて聞いたかのように大きな眼をパチクリさせた。

「少女のマンションで、極秘ですね、わかりました。いったい、ビデオを何に使う気ですかね？」監督は社長の顔を覗いた。社長は面食らった顔で「わしに聞かれてもな～」と肩を落とした。「とにかくやりましょう。タチはアンナ、ネコが少女ということで。社長の面子ってものがありますからね、まかしてください」監督は握りこぶしを作った。「そうか、これで安心だ、頼むよ！」笑顔になったブルドッグの頬が少し紅潮した。

監督は携帯を取り出すと１０月のスケジュールを確認した。「そうだ、少女のマンションの住所と電話番号を教えていただけますか？」監督が尋ねると社長は胸ポケットから電子手帳を取り出し少女の項目を呼び出した。監督はマンションの住所、ボディーガードの電話番号を携帯に打ち込んだ。「仕事に関して、すべてボディーガードを通すわけですね、このボディーガード、日本語がわかりますか？」監督は確認した。「彼は通訳も兼ねているそうだ。そういうことだ、よろしく頼む」社長は新しい葉巻に火をつけた。

早速、自宅マンションに帰った監督は書斎で心を落ち着けると仕事の流れを考えた。この仕事に参加するメンバーは自分を除いて、タチのアンナ、ネコの少女、それにボディーガードの通訳ということになる。アンナには後で説明をすることにし、監督はボディーガードに連絡を取ることにした。登録した番号をプッシュすると訛りのある中年の声が出た。

監督は一瞬言葉に詰まったが、撮影の依頼の件を話し始めた。「突然、申し訳ありません。私、コスモムービーの近藤ヒカルと申します。今、お時間よろしいですか？」男の「はい」と言う声を聞くと監督は話を続けた。「今回、スアール様の撮影の件で打ち合わせをいたしたいのですが、お時間をとっていただけませんか？」監督が仕事の話を切り出すと、男は当然のように場所と日時を指定してきた。場所は所沢市にあるマンション、グランパールⅢ８０５、日時は１０月１１日、午後８時、と予定していたように即座に答えた。男に了解の返事をすると、もう一度男の名前を確認した。男は低い声でキムと言った。

作品は思っていたより小さなものだったので、一日の撮影で問題ないと判断した。セッッティング、メイク、打ち合わせ、リハーサル、３パターンの撮影、取り直しを考えても８時間あれば足りると判断した。監督は一刻も早く少女に会いたかった。この撮影はどちらかと言えば易しいし、アンナもレズ物は得意であったから気は楽であった。だが、英語しか分からない少女とのコミュニケーションが少し不安であった。

２０階建ての高層マンションの玄関右手に立つと８０５をプッシュし確認を取った。自動ドアが開くと左手に二つエレベーターがあり、手前のエレベーターは待機状態であった。エレベーターに乗り込むと８をプッシュした。降りてプレートの番号を確認しながら左手に歩いていくと８０５が現れた。ドアの前で時間を確認すると午後７時５７分であった。インターホンを押すとロック解除の小さな金属音が鳴った。

ドアを開けると正面にグレーの背広を着た中年の口ひげを生やした男が立っていた。監督は硬い頬を緩めて挨拶すると男も笑顔を作った。「はじめまして、近藤ヒカルと申します。よろしくお願いします」監督は名刺を内ポケットから取り出すと左手を添えて男に手渡した。男は名刺を受け取ると一瞥して中に案内した。監督がブルーのスリッパに履き替え男の後について廊下を歩くと、２０畳ほどのリビングが目の前に現れた。

リビングの中心に構えた茶色のレザーソファーの横にはショートパンツの少女が立っていた。少女は黙って監督を見つめた。背丈は約１６５センチ、バランスは９頭身、脚は細くて日本人にはない脚の長さ、髪は黒く長さは肩下約１５センチ、肌は色白、顔は彫りが深く彫刻的美形、特に鼻が高く、眼が大きい、胸は小さめ、監督はすばやく少女を分析した。少女は化粧をしているため大人っぽく見えるが、直感では１４、５歳と判断した。

男は監督をソファーに腰掛けさせると少女を正面に腰かけさせた。少女は一言もしゃべらず、笑顔も見せなかった。監督は少女に何から話し始めればいいかわからなかった。英会話は苦手で口が動かなかった。男は見かねて、低い声で話し始めた。「スアールは英語しか話せない。必要な指示は私がします。私に言っていただければ私が指示します。少女はどんな指示にも従います。撮影の日時を決めてください。必要な準備があれば何でも言ってください」男は流暢に日本語を話した。

監督は電子手帳を取り出し、１０月１４日、１０時より撮影開始と予定を告げた。男は携帯に打ち込むと頷いた。男は何か準備することはないかと聞いたので、すべての準備はこちらでするが、少女が使いたい衣装があればそれも着用可と伝えた。小さな仕事であるため、頭の中で撮影の段取りはすでに出来上がっていた。気になったのは、少女にまったく笑顔がないことであった。笑顔がなくとも撮影は可能だが、アンナがうまくリードしてくれるかが心配になった。

監督にとって始めて見る顔であった。彫刻のような美貌ではあるが、蝋人形のようで気味が悪かった。まったく、少女らしさがなく、感情のない死人のような雰囲気をかもし出していた。少女はどんな指示にも従うと男は言ったが、演技は本人の感情でやるものなのだ。果たして、仮面のような顔でどんな表情を作り出すのだろうかとますます不安になった。アンナまで固まってしまっては理想の作品はできない。

少女にレズができるか確認してもらうことにした。レズができるかどうか訊ねてほしいと男に伝えると英語で少女に話しかけた。「You have to play lesbian.」男は指示するように言った。蝋人形のような少女は頷いた。不安は払拭できなかったが、どうにか撮影はできると判断しほっとした。しかし、笑顔のない少女の作品が認められず、つき返されるようなことになれば、どう対処すればいいか恐怖が襲ってきた。この少女を操っているのはマフィアではないかと心が叫んだからだ。

今まで多くの素人を使って撮影をしたが、このように感情が消滅してしまった表情の少女は初めてであり、どのようにして笑顔を作らせればいいのか、いい方法が浮かばなかった。この少女とかかわるのはアンナと監督だけである。アンナが固まってしまったら、監督はどんな指示を二人に与えればいいのかまったく思い浮かばなかった。しばらく考え込んでいると男は少女に指示を出した。「Why don’t you leave here?」少女は一言もしゃべらず、幽霊のように無表情のままリビングを出て行った。

監督は少女の生い立ちについて知りたかった。質問しても答えてくれないことを覚悟で、じんわり聞くことにした。男は用件が済めばさっさと引き上げろと言わんばかりの目つきをしたが、監督は腰を上げる気にならなかった。もし、この男もマフィアの一員であればいかなる質問にも警戒するはずだ。この場を和らげる方法はないかと必死に頭をめぐらした。通訳であり、顔立ちからして、この男はきっと秀才に違いない。とにかく、この男をおだてる作戦に出た。

最初の言葉に戸惑ったが、勇気を振り絞って声をだした。「キムさんはどちらの大学を卒業なされましたか？とても日本語がお上手ですね。びっくりしました」キムは明るい笑顔をつくると得意げに話した。「ソウル大学です。専攻は国際法です。英語、日本語、ドイツ語、フランス語、中国語はある程度話せます。今、東京外国語大学でハングル語を教えています。あなたはどこですか？」やはり、キムは秀才であった。心の中でしめたと思った。

「慶応大学です。ご存知ですか？出来が悪くて英会話は苦手です。もっと英会話を勉強しておけば良かったと後悔しています。キムさんは通訳の仕事もなされているんですね」監督は答えやすい質問を続けた。「はい、通訳業の登録をしています。専門分野は法律及び政治経済の通訳ですが、今回、この少女の通訳を引き受けました。と言うのも、日当が平均の５倍もあるんです。これは余計なことでした」男は少女のボディーガードと聞いていたが、単なる通訳と言うことがわかり恐怖感は消えた。

「ところで、私の仕事のことになりますが、監督は女優の個性、私生活、生い立ちをある程度把握しないと、思った演技の指導ができません。本来ならば、スアールさんとじっくり会話したかったのですが、英会話が苦手なものでそれがかないませんでした。キムさんが話せる範囲で彼女のことを話していただけませんか？」監督は思い切って本題に踏み込んだ。キムはしばらく黙っていた。おそらく、彼はスアールから素性について何か聞きだしたと思われた。

「スアールについて知ることがどうしても仕事に必要ですか？」キムは不安そうな顔で念を押した。撮影がうまくいかなければ、キムにとっても都合が悪いと見えた。さらにキムは話を続けた。「ここだけの話ですが、依頼者から通訳以外のことは一切話さないように、と念を押されています。２日前に会ったばかりでほとんど何も知りません。彼女も自分のことは一切話しません。いったいどういうことをお知りになられたいのですか？」キムは窮地に追い込まれたように硬い表情で握りこぶしを作った。

「できれば年齢だけでも教えていただけませんか？」監督はキムの心情を押し計らって聞き出しやすい事柄から質問した。「年齢ですね、これはかまわないと思います。１４歳です」キムは即座に返事した。「１４歳ですか。スアールさんは化粧されているせいか、１７、８歳かと思いました。日本では中学生に当たりますが、彼女はシンガポールの学校に通われているんですか？」キムはこれ以上話したくない表情をしたが、仕事と関係があれば問題ないと判断したらしく話を続けた。

「はい、シンガポールの学校です。彼女は英語とタガログ語を話します。彼女の私生活についてはまったくわかりませんが、非常に無口で人との会話を好みません。他には？」キムは開き直ったように話した。「いや、ちょっと気になったことがありまして、彼女はまったく笑顔を見せませんね、いつもこんな感じですか？」監督は最も気になっていた点を聞いてみた。「監督であれば気になられることですね、出会ってから一度も、私に笑顔を見せたことがありません。人を嫌っているようですね、笑顔を作らないと撮影ができませんか？」

「いや、できないことはありません、ただ、初めてなんです、あそこまで表情の無い少女を見たのは。日本の中学生は意味の無いことでもすぐに笑うんですよ。日本が豊かだからですかね。彼女は観光に来られたとお聞きしましたが、日本の少女を見られてびっくりしたでしょうね」監督は笑顔を見せない理由が生い立ちにあると思っているが、キムが生い立ちを聞き出していたとしても、そう簡単には口を割らないと思えた。

「実は、彼女は一切外出できません。彼女はある方から指示を受けているのです。彼女はある方のお供をしており、２０日には上海に飛び立ちます。私は１８日まで通訳及びボディーガードを任されています。とにかく、いい作品ができることを願っています。私にも責任がありますから」やはり、キムも責任を感じていた。話が進むにつれてますます少女の素性が気になってきた。

「つかぬ事を伺いますが、キムさんは一日中、彼女と一緒なのですか？」この様子を見ると、このマンションにはキムと少女しかいないと思えた。言い方を替えれば、キムは少女の監視役ということだ。「はい、私も１８日まではこのマンションを出ることができません。通訳は当然ですが、このことが契約の第一条件なのです。１０日間の辛抱と思っています」しかめっ面のキムの表情は、こんな仕事、引き受けなければ良かったと後悔しているような雰囲気をかもし出していた。

「それは、それは、責任重大なお仕事を引き受けられましたね。失礼ですが、キムさんは独身でいらっしゃいますか？」キムは意表を突かれたような表情を一瞬したが、素直に答えた。「はい、まだ独身です。できれば日本女性と結婚したいと思っています。少し、高望みでしょうか？ハハハ・・」キムの心は少しずつ開放的になってきた。外出できず、心は鬱積し、孤独になっていたところに、気が許せそうな監督に出会い気分がハイになった。

監督はしめたと思った。キムは話し好きで、本来、人がいい性格と判断した。しだいに、質問を浴びせかけても答えてくれるような雰囲気が出来上がってきた。「職業病ですかね～、どうも女性の私生活に関心が働きましてね、スアールさんはここでいつも何をされていらっしゃるんですか？まだ、中学生ですから学校の宿題とかですかね？」監督はほんの些細なことでもいいから、彼女のことを知りたかった。

キムは監督が気に入ったらしく、つい３０分ぐらい前に訪問した時の警戒心がすっかり消えていた。ぽんっと膝を叩くと、さっと腰を上げ冷蔵庫に向かった。缶ビールを二本取り出すと、笑顔を作って戻ってきた。「今日は何か愉快です。監督と話ができてとても楽しい気分です。今夜は二人で飲み明かしましょう」テーブルに二本の缶ビールを置くと、缶のプルを引き開けた。一本を監督に手渡し「コンベ！」と缶ビールを監督の缶ビールに押し当てた。監督も真似て「コンベ～！」と笑顔で応えた。

「あ、先ほどの何をしているかですが、彼女の部屋には一度も入ったことがありません。このマンションは３ＬＤＫで私の部屋もあります。彼女と話す機会はまったくありません。食事も宅配の弁当を各自の部屋で食べます。時々、リビングにやってくることがありますが、冷蔵庫のジュースを飲むとすぐに部屋に戻ってしまいます。彼女のことは何もわかりません。それより、趣味の話でもしましょう。私の趣味はカラオケです。監督は？」キムは少女の話を避けようと話を替えてきた。

このような質問ではやはり口を割らないことに気づいた。監督は一口ビールを飲んで、しばらく考えた。キムは独身、しかも、外出できない状態で孤独だ。だから、人が恋しくなってたわいも無いことを話そうとしている。頭に稲妻のようなひらめきが脳裏に落ちた。と同時に、優希の笑顔が花火のように一瞬目の前に広がった。「趣味はお酒と女です。キムさんは女性のほうはいかがですか？」キムの欲求不満を利用する手を考え付いた。

「お酒は好きですが、女性は苦手です。だから、いまだ、独身と言うわけです。韓国女性より日本女性が好きになってしまいました。日本女性は美しくおしゃれで、知的で礼儀正しくて、とにかくいいです。でも、気が弱くて付き合うことができません。これは生まれつきの性格で情けないです。日本語もかなり自信ありますが、女性の前ではまったく声が出ません。女性恐怖症ですかね」キムは落ち込んだ声で話した。

監督の目が輝いてきた。やはり、キムは思っていた通りの男であった。早速、優希を呼び寄せることにした。優希は献身的で監督が困っているときには必ず手助けをしてきた。しかも、窮地に陥っても機転を利かして問題を解決できる才女だ。「キムさん、そんなに自暴自棄になることはありませんよ。日本の男も女性との会話は苦手なものです。女性の前に立つと真っ赤になって一言も話せない男もたくさんいます。要は、練習です。訓練です。英会話も実践じゃないですか。日本語も同じです。男なら、当たって砕けろ、とにかく、女性と話すことですよ。女優でとても愉快な優希という女優がいます。彼女と話をすればきっとコンプレックスも吹っ飛びますよ。今からはじめましょう」

監督は携帯を取り出し、優希にマンションに来るように頼んだ。４０分ほど、キムと趣味やAVについて話していると、玄関からの呼び出しの声がした。優希の甘い声だ。しばらくすると、インターホンが鳴った。監督は即座に立って迎えに行った。優希を迎え入れると入口のところで小さな声で、ここに住んでいる少女スアールの素性をキムから聞き出してほしい、と耳打ちした。ピンと来た優希は豊満な胸を両手で持ち上げた。

監督は固まってしまったキムに優希を紹介すると、彼女をキムの右横に座らせた。監督はサイドボードに目をやると、さっと優希は立ち上がった。優希はウイスキーとグラスを運んできた。次に、氷と水も持ってきた。手際よく水割りを作ると、キムの右手を取ってそっとグラスを握らせた。キムは日本女性の手に触れたのは始めてであった。震えながら唇にグラスを当てるとカチカチと音がした。

監督はいっそうキムをおだてることにした。「キムさんはソウル大学卒業のエリートなんだ。現在、東京外国語大学で教鞭をとられ、通訳もなされていらっしゃる。趣味はカラオケ、乗馬、登山、囲碁、卓球、切手収集、遺跡巡りなど多趣味でいらっしゃる。キムさんとお話しているととても勉強になるよ」監督のおだては効果があったと見えて、キムは優希から眼をそらしていたが、時々、笑顔を優希に見せるようになった。

優希は情報を得ると機転を利かせた。「キムさんはどんな歌を歌われるんですか？」キムは笑顔を見せると「ミスチル、嵐、カラ、ＡＫＢとか一人で歌っています。人に聞かれると恥ずかしいもので」ＡＫＢと聞いた優希は水を得た魚のように大きな声をだした。「え！ＡＫＢは誰押しなの！教えて！」優希はキムに身体を預けるようにキムに寄りかかり、ナイトドレスからあふれ出そうな豊満な胸を押し付けた。キムはウイスキーをこぼしそうになったが、気持ちよかったのか目じりを下げて優希を見つめた。

「ゆうこ押しです。優希さんは？」優希の媚薬が効き始めた。キムの心は羽目を外し始めた。「優希も、ゆうこ押し、うれしいわ！」優希はキムを抱きしめ、右の頬にチュ～をした。キムはお酒が回ってきたらしくニンマリと笑顔を作った。「優希さんもカラオケ好きですか？いつか一緒にカラオケ行きませんか？」キムはとうとう優希の罠にはまってしまった。「素敵、約束ね！
でも、奥さん、やきもちやかないかしら？」優希は監督にウインクをした。さすが優希、と心でほめたが、これからが本番とキムに水割りを作り手渡した。

「キムさんはまだ独身なんだよ、チョ～イケメンなのに」キムはイケメンといわれ少し身を乗り出した。「え～～～、信じらんない！うっそ～」優希はキムを見つめると彼の右手をしっかり握り締めた。「そうなんです、彼女もいないんです、淋しいです」酔いがかなり回ってきたのか、キムの口調はろれつが回っていなかった。「キムさん、少女と二人っきりだとやりきれないでしょう。今夜は優希がとことん付き合ってくれますよ、ね、優希！」キムの眼はうつろになってきた。

「さあ、キム、飲みましょう、優希でよかったら、付き合うわ」優希は彼女のグラスを右手に取るとキムの唇に当てた。キムは笑顔を作ると口をあけた。優希はグラスを置くと彼女の右手でキムの右太ももの内側をそっとさすった。キムはぼんやりとした眼で「この仕事は少しヤバかったです、もう疲れました」キムはやはり少女から何かを聞きだしていたと監督は直感した。

「少女に何か小言でも言われましたか？」監督はあと少しと感じた。「う～～～」キムの理性が消えかかっているのが分かった。キムは秘密にしていたことを誰かに話したいのだ。秘密にすればするほど人は苦しくなる。「少女と口喧嘩でもしたんですか？」監督は追い討ちをかけた。「彼女は、彼女は、She ‘s a call girl. She’ll be killed.」キムはとうとう落ちた。キムは死んだように優希の両太ももの上に顔を伏せた。

無謀な賭け

監督は身の毛もよだつ言葉を聴いてしまった。もし、そのことが事実であれば少女はマフィアに殺されるに違いない。また、このことは誰にも相談できないばかりか、誰にもどうすることもできないことだった。キムも彼女から聞いた言葉に苦しんだに違いない。監督は聞き出すべきではなかったと後悔した。キムの言葉は徐々に監督を苦しめていった。しかも、少女を撮影するという不運を背負ってしまった。

翌日、監督はあまりのショックに仕事をする気力を失っていた。撮影現場の指示は右腕の優希に任せて、自分にできることは無いかと悶々としていた。自宅マンションのベッドに横たわり、昨夜のキムのやるせない表情を何度も思い浮かべていた。「She’ll be killed.」この言葉が頭の中を何度も駆け巡っていた。この言葉から次から次へといろんな思いが湧き出てきた。

中国、インド、東南アジアでは多くの少女が売買されているように、少女は貧しい家庭に生まれ、人身売買ブローカーに親は彼女を売ったのか？マフィアは少女をコールガールとしてどのように利用しているのか？利用価値がなくなったとき、警察の手の届かないデリーの売春宿に売られてしまうのか？マフィアのことを知りすぎたために殺されるのか？絶望のあまり自殺するのではないか？

監督の心は少女と一緒に地獄に落ちて行った。神はなぜ現世に地獄を作ったのか！監督は神を恨んだ。神は少女を見殺しにするのか！彼女は単なる物でしかないのか？いや、少女は日本人と同じ人間だ。あ！心が地獄から叫んだ。彼女はお金で売買された。ということは、少女をお金で買えばいい。これしか、彼女を救う方法は無い。しかし、マフィアが少女を売るだろうか？

もはや、悩んでいる場合ではない。一刻も早く少女を買わないと、殺されるかもしれない。監督はキムに交渉役を頼むことにした。すぐに、連絡を取り今夜の７時に少女のマンションに行くことにした。キムは重要な話と聞いて１４日の撮影のことだと思った。もはや猶予はならなかった。監督は７時前に少女のマンションに飛び込んだ。キムは昨夜と違って友達を迎え入れるように握手で迎え入れた。

監督はソファーに腰掛けると早速、キムの背中越しに「お願いがあります」と切り出した。キムはコーヒーメーカーで作ったコーヒーを二つのコップに注ぐとプレートにのせて運んできた。「いきなりですね。そんなにあわてることじゃありませんよ。とにかく、作品を期日までに納品すれば、報酬はいただけますよ。そんなに気にすることじゃありませんよ」キムは無表情な少女の作品が出来上がることを見越して、監督に気を使った。

「いや、キムさん、折り入ってのお願いとは、作品のことではないのです。少女のことです」監督はここから先を言う勇気が出てこなかった。「少女のこととは？」キムはキョトンとした顔になった。「実は少女を買いたいのです」監督は勇気を振り絞ってはっきりといった。「買いたい？意味が良く分かりませんが」キムはコールガールのことを、昨夜しゃべってしまったのではないかと恐れた。キムは昨夜お酒によってしゃべったことをまったく憶えていなかった。

「彼女、自身を買い取りたいのです。ＡＶ女優として使いたいのです。ある方に話していただけないでしょうか？」キムに意味が通じただろうかと不安になったが、とにかくキムに一役買ってもらうことだけを考えた。「スアールを一時的ではなく、と言うことですか？数年の使用期間を定めた契約と言うことですか？」キムは具体的に質問した。監督はどう答えて言いか迷ったが、こう言うしかなかった。「無期限に購入したいのです！少女をＡＶ女優としてこれからずっと使いたいのです。彼女は最高の女優になると思っています。キムさん、お願いです、どうか、先方にお願いしてください」さすがに、キムはびっくりした。

キムはしばらく考え込んだ。なぜ、こんなことを監督は突然言い出したのか？昨夜、秘密にしていたことをしゃべってしまったのではないか。もし、大金を払ってでも、監督が少女を本当に買うことができれば少女は救われる。キムもこのチャンスを逃せば少女は地獄に落ちると思った。「はい、分かりました。ある方に話してみますが、私には自信がありません。よろしいですか？」キムも少女を救う手助けをする決意を固めた。

１０月１４日、撮影が始まった。タチはアンナ、ネコがスアール。３パターの撮影が開始された。編集後、もっともクオーリティの高い作品を納品することにいた。①姉（アンナ）と妹(スアール） ②女教師（アンナ）と女生徒（スアール）③女医（アンナ）と患者（スアール）この３パターンの撮影が開始された。スアールは初めての演技でまったく無表情であったが、アンナのリードで順調に撮影は進んだ。

１０月１５日、キムから少女の身請けの返事が来た。売買は可能との返事であったが、金額は５０００万円が提示された。これは幸運であったが、思っていた以上に高額であった。監督がＡＶ女優として購入したいと言ったため、マフィアはＡＶメーカーの利益を考えて大きく提示してきたのだ。監督はいまさら引き下がる気はなかった。早速、コスモムービーの社長に交渉することにした。

監督は秘書に約束を取り付けると社長室に飛んでいった。社長は作品のことで相談に来ると思い無理して時間を作った。監督はいつもより深く頭を下げて入室するとソファーにゆっくりと腰掛けた。「まあ、そんなに深刻に考えなくともいいじゃないか。こんな撮影は初めてのことだし、彼女は素人で、しかも、まったく笑顔を作らないときている、しょうがないじゃないか。監督の責任じゃない。先方にはわしからできる限りのことはやったと言い訳しとくよ」社長は監督の心情を推し量った。

「は～、思っていた通り、笑顔の無い作品になってしまいました。これを納める以外にありません。後は先方の出方次第です。ところで、他に、お願いがあって参りました。」監督は両膝を閉じて、その上に両手を添えて深く頭を下げた。「いったい、何のまねだ、だから、そんなに深刻にならなくともいいといったじゃないか」社長は頭を下げた監督の左肩をぽんっと叩いた。

監督はゆっくり頭を上げると「実は、お願いとは、少女を買い取ってほしいのです。５０００万円で」監督は改めて深々と頭を下げた。「ちょ、ちょと、何を言っているのかさっぱり分からん。もっと、分かりやすく説明したまえ」社長は唐突な発言に腰を浮かした。「今言ったとおり、少女を買い取ってほしいのです。ＡＶ女優として使いたいのです。お願いします。先方の提示額は５０００万円です。高額な金額であることは承知しています。必ず、利益を上げて見せます。お願いいたします」

「５０００万円！いったい何を考えているんだ。君も承知だろう、今のＡＶ業界の現状を！頭がおかしくなったのか？君ほどの秀才が、なぜ今頃こんな馬鹿げたことを言うんだ。しかも、笑顔一つ作れない素人娘が金になるとでも思っているのか！眼を醒ませ！今日の話は聞かなかったことにする。もう帰りたまえ！」社長は顔を真っ赤にして怒鳴った。監督はじっと耐えていた。
ただ、少女を救いたかった。だからといって、同情心だけで救いたいのではなかった。

ヒカルには美学のポリシーがあった。美大で油絵を専攻したいと思った時期もあった。しかし、絵の才能に限界があるのを悟った。だから、監督の道を選んだ。ヒカルは少女を一目見たとき美の衝撃を受けた。彼は自分の美意識を信じたかった。きっとこの少女は世界的大女優になると確信した。確かにこの賭けに失敗すれば、この業界からは追放される。しかも、大きな借金を背負うことにもなる。しかし、ヒカルは決心した。自分の“美学”と心中することを。

監督は最後のお願いをすることにした。「確かに笑顔一つ作れない素人です。しかし、５０００万円のコストで億の売り上げをして見せます。必ず約束します。万が一、できなかった場合、すべての負債を私が負います。お願いいたします」監督は勢いよく立ち上がると入口の前で直立した。そして、膝を折ると静かに土下座した。社長は一言もいえなかった。しばらく沈黙が続いた。社長は拳骨を作り、腕を振り上げた。その拳骨は禿げた社長の頭に落ちた。

「分かった！５０００万円用意する。監督を見くびっていた俺が恥ずかしい」社長は監督を立たせると静かに部屋から出て行った。社長はポリシーも夢も失ってしまった自分が情けなかった。監督がうらやましかった。目先の金儲けのことしか考えられなくなってしまった自分が惨めでならなかった。１０代の自分の姿がふと思い浮かんだ。オリンピックを目指し無我夢中で泳いでいた少年の姿。

スラム街の天使

少女はマフィアから解放され、女優として歩み始めた。臓器を売って子供を育てた母親。麻薬に手を出し、お金ほしさに子供を売った父親。売春宿でエイズになり路上で死んだ姉。スモーキーマウンテンで今でもごみをあさっている弟たち。家族は貧困と言う地獄から抜け出すことはできない。世界中の貧困はいまだ続いている。

監督はスアールを親友の映画監督に預け、“スラム街の天使”と題した台本を手渡した。その後、その映画が封切されると、世界中の話題となった。一人の男によって地獄から救われたスラム街の少女は、一躍、時の人となった。インタビューを受けたスアールは涙を流して「ヒカルに会いたい」と一言つぶやいた。そのころ、もはや、ＡＶ界ではヒカルの名前は消されていた。また、彼の消息を知るものもいなかった。

スラム街の天使

http://p.booklog.jp/book/57028

著者：サーファーヒカル
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/57028

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/57028

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ